



挑む ⑦

競技中は汗がにかかるのが嫌で、練習でも補聴器を外す。相手選手が近づいているのに気付かず、失点することもある。味方選手の近くで大きな声で話し、監督とは手話通訳を介してコミュニケーション。決めてある戦術に従った自分の判断やアイコンタクトで、相手チームがどう攻めてくるかを考えながら動く。

持ち味を、相手守備の外からのディスタンスシュートに見いだす。海外と初めて対戦する。体格の良い相手に「自分のシュートが通用するのか」という不安がつきまとう。5月の合宿でシュートがまったく入らず、攻撃の選択肢を見失った。上手な選手の動画を繰り返し見て、1プレーごとに先輩に「今の、どう思いました?」と助言を請い、吸収し、自信につなげる。

生後間もなく音に反応しないことに親が気付き、4歳から左耳に補聴器をつけている。右耳はほぼ聞こえない。筑波技術大への進学は中学3年の時の担任が「数学が好き

ハンドボール 林 遼哉選手(21)

身体能力高い「末っ子」



強化合宿でシュート練習する林遼哉選手＝東京都北区の味の素ナショナルトレーニングセンターで

競技始め2年で代表入り

なら、どう?」と勧めた。ろ
う者が集まる大学と知り、安
心して過(せる)と思っ
た。

中学、高校で卓球。大学で
は野球やバスケットボール、
バレーボールなどで「遊んで
いた」。2年生の夏、デフリ
ンピック出場を目指し、学内
サークルをつくった小林優太
選手(24)から「日本代表に興
味ない?」と誘われた。サー

はやし・りよつや 2004年、東京都東村山市出身。身長180センチ。小学校は聴者と同じ地元校で、中学高校は杉並区の中央ろう学校。筑波技術大産業技術学部支援技術学コース4年。キャンパス内の寄宿舎で生活し、会合で誰が発話しているのかを示すシステムを研究している。すしが好きだが、バイト先はイタリア料理店。趣味は音楽鑑賞と「推し」を見ること。

クル顧問の中島幸則教授(63)と気持ちいい」とサークルから毎日のように「運動能力が高いから、やってみな」と声をかけられた。当時、ハンドボールを知らなかった。最初は断っていたが「熱く誘われ」夏休みの体験会で遊び感覚でやってみた。「いろいろ?」と巻き込んだ。小林選手の卒業後はサークルが母体のクラブに移り、ク

ラブでの成績や強化合宿の成果、選考会を経て6月、競技を始めて2年で代表に選ばれた。「入れると思っていなかった。世界と対戦するイメージがまだ湧かない」

代表の亀井良和監督(57)は「身体能力が非常に高い。相手守備陣に切り込む、点取り屋の役割を」と期待する。一方で「まだボールを失うミスが多い」と若さを指摘する。経験値は明らかに少なく

「自分のプレーに迷いがある。パスするべき場面で無理にシュートを打ったり、パスできる時にしなかったり。好機をつぶしたことに後で気付く。決断力が課題」と自己分析。「今大会は通過点。試合が終わっても、自分の課題は終わらない。世界に初挑戦した後の反省や対策を、4年後に生かしたい」。代表チーム最年少の「末っ子」の視野には次回大会も入っている。

〓 終わり
当しました)
(この連載は大野孝志が担

東京デフリンピックに出場する筑波技術大卒業の他の選手の皆さん(順不同、大学まとめ)
翁孝嘉、加賀屋圭一(ハンドボール)▽岡部祐介(陸上・十種競技)▽蒲生和麻(柔道)▽橋本樹里(バスケットボール)▽中島梨栄(ゴルフ)▽杉本大地、岩淵亜依(サッカー)